

ドン・ボスコの風

Joyful Communication !

SALESIAN
BULLETIN
JAPAN

July 2012

No.

9

特集

座談会

おかえり!
ドン・ボスコの家に

ドン・ボスコの学び舎の家庭的雰囲気

Casa



連載 インタビュー

ドン・ボスコの教え子たち

ノエ征爾さん

時を超えて紡ぐ
ショートストーリー

ありがとう

家庭的な寄宿学校

ドン・ボスコの教育の原点

孤児園の子どもたちの父と母

Ciao! サレジオ家族探訪

サレジオ学院中学校・高等学校

ドン・ボスコゆかりの地を巡る
トリノ ピナルディの家

世界のサレジオ家族だより
イエスのカリタス修道女会
創立75周年



教育者ドン・ボスコに学ぶ

～ 2015.8.16 ドン・ボスコ生誕 200 周年に備える～

サレジオ会日本管区長
アルド・チブリアニ神父

現在私たちはドン・ボスコの生誕 200 周年を祝う準備の 3 年間に過しています。ドン・ボスコの誕生日、8 月 16 日から始まる準備の 2 年目は「ドン・ボスコの教育法を知る」ということがテーマになっています。

ドン・ボスコにとって教育は、最初に理論があってそれを実践したのではなく、自分の青少年への思いを実践していく中で、その体験を説明するために「ドン・ボスコの教育法」が理論化されました。この意味でドン・ボスコの教育法はきわめて現実的で実用的なものです。ですから、私たちはドン・ボスコの教育法を学ぶとき、その理論を知ることはもちろんですが、その体験を知らなくてはならないのです。

ドン・ボスコの教育体験の出発点であるトリノのヴァルドッコでのオラトリオ（子どもたちを集め、共に学び、遊び、

祈り、生活するところ）には、後にその教育法の基礎となる要素が詰まっています。サレジオ会の会憲は次のようにまとめています。「ドン・ボスコは、最初のオラトリオで典型的な司牧体験を積んだ。このオラトリオは、青少年にとって、迎え入れてくれる家、福音化の行われる小教区（教会）、人生に備えさせてくれる学校、友人としてふれ合い、快活に生きることが学べる運動場であった」（サレジオ会の会憲 第 40 条）。

ドン・ボスコの教育体験を知り、そこに立ち戻り、家（無条件に受け入れられ、安心していられる場）、小教区・教会（神との関係を培い、人生の意味を見いだす場）、学校（能力を伸ばし、社会に貢献して生きるための技能・知恵を学ぶ場）、運動場（共に分かち合い、生きていく仲間との関係を築く場）という 4 つの要素が、私たちの青少年たちとの



出合いの現場で生き生きとよみがえり、喜びの福音となることを願っています。

2012 年 6 月 24 日
ドン・ボスコの霊名である
洗礼者聖ヨハネの祭日に



ドン・ボスコと少年たち
(1861 年、ドン・ボスコの一番古い写真)

「教育者ドン・ボスコ」を学ぶために—— おすすめの本 ——



ドン・ボスコ自叙伝

ドン・ボスコ著 石川康輔訳
四六判 350 頁 ¥1,260

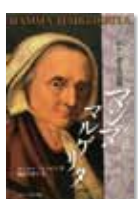
教皇の命令により執筆された自叙伝。幼少期から彼の事業が軌道に乗るまでの 40 年間の回想録。



若者を育てる ドン・ボスコのことは

ガエタノ・コンプリ編著
四六判 237 頁 ¥1,050

「共にいる教育」、愛・道理・信仰による「予防教育法」。若者がいきいきと育つ教育法の秘訣が満載。



マンマ・マルゲリタ ドン・ボスコの母

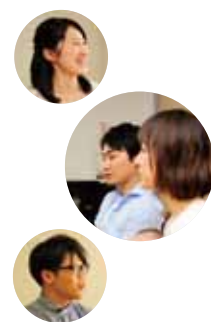
ピーター・ラッピン著 柳沼千賀子訳
四六判 288 頁 ¥1,260

母マルゲリタはドン・ボスコのもとに集まる少年たちの母となった。生涯を神にささげ、神のみ摂理にすべてを委ねきった母の物語。

INDEX もくじ

- 3 Message ● 教育者ドン・ボスコに学ぶ
- 4 ドン・ボスコゆかりの地を巡る ● トリノ ピナルディの家

6 特集 ● 座談会 ● おかえり！ ドン・ボスコの家に



ドン・ボスコの学び舎の家庭的雰囲気

倉澤麻莉香さん from 日黒星美学園小学校・中学校・高等学校
野口洋一さん from 日向学院中学校・高等学校
本石拓也さん from サレジオ高専(旧育英工業高等専門学校)
本石美春さん from サレジオ高専(旧育英工業高等専門学校)

- 11 特集エッセイ ● 孤児園の子どもたちの父と母 文：中田鈴雄
- 12 Essay ● 家庭的な寄宿学校 —ドン・ボスコの教育の原点—
- 14 サレジアン旬な一言 ● 言っときますけど…
- 15 Book Review ● 本のひととき
- 16 世界のサレジオ家族ニュース

20 インタビュー ● ドン・ボスコの教え子たち ノゼ征爾

from サレジオ学院中学校・高等学校



22 時を超えて紡ぐ ● ありがとう 文：ノゼ 征爾 絵：おむら まりこ

- 24 Ciao! サレジオ家族探訪 ● サレジオ学院中学校・高等学校
- 26 世界のサレジオ家族だより ● イエスのカリタス修道女会 創立75周年
- 28 サレジアン小伝 ● ありがとう! タシナリ神父 日本を愛した宣教師
- 29 News ● 活動報告
- 30 Info ● お知らせ
- 31 読者プレゼント

「ドン・ボスコの風」について——「ドン・ボスコの風」は、喜びを共にし、サレジオ家族の原点を見つめ、絆を深め、社会・世界に羽ばたいて、その実りを分かち合うためのコミュニケーション誌を目指しています。ドン・ボスコの精神を多くの方々と共に共有し、新しいつながりに広げていくきっかけとしてご活用いただければ幸いです。皆様からの情報提供とご支援をよろしくお願いいたします。



表紙の写真

イタリア トリノ

ドン・ボスコの事業発祥の地。
この建物の 3 階にドン・ボスコ
の居室とオフィスがあった。



ドン・ボスコとは？

「青少年の友」と呼ばれ、見立てられた若者たちのために生涯を捧げた神父。1815 年イタリア生まれ、名前はヨハネ（イタリア語でジョヴァンニ。ドン・ボスコは「ボスコ神父」の意味）。青少年教育に献身するサレジオ会を創立。1888 年帰天。

サレジオ家族とは？

ドン・ボスコの精神を受け継ぐ修道者・信徒・協力者たち。世界 130 以上の国で、29 団体、40 万人以上のメンバーが、学校、教会、社会生活のさまざまな場面で青少年や貧しい人々のために奉仕している。サレジアンファミリーとも呼ばれる。



ピナルディ聖堂の聖母子像。



ピナルディの家の絵。建物の壁に水場が描かれている。建物の左奥の出入口に十字架があるところが納屋の部分。ここを聖堂にした。



当時の水場は今も現役。



アシジの聖フランシスコ教会にある脇祭壇。1841年、新司祭ドン・ボスコはここで指導司祭カファッソ神父に付き添われ初ミサをささげた。



アシジの聖フランシスコ教会の香部屋（支度部屋）。ここでドン・ボスコはガレツリ少年と出会った。

復元された現在のピナルディ聖堂。天井が低かったためドン・ボスコは50cmほど床を掘り下げてもらった。

トリノ | ドン・ボスコの事業はじまりの地 | ピナルディの家

★ イタリア北部ピエモンテ州 トリノ ★



ドン・ボスコゆかりの地を巡る

トリノで司祭としての第一歩

1841年6月5日、25歳のジョヴァンニ・ボスコはトリノで司祭に叙階され、「ドン・ボスコ」（「ボスコ神父」の意味）と呼ばれるようになった。トリノ教区の司祭として教会で働くか、または貴族の家の家庭教師になることもできたが、ドン・ボスコは霊的指導者カファッソ神父の勧めにより、自分の道を見つける時まで、トリノにあった2年コースの「コンヴィット」という若い司祭のための研修所に入った。日課は基本的、実践的な講義や授業と自習だったが、司牧（信徒を導き育てる）体験の機会も与えられていたようである。

当時のトリノは産業革命の時代に入っていた。仕事を求める若者が街にあふれていたが、職がなく、搾取され、世話する人がいないために悪の道に走って刑務所に入る若者も多かった。自分の目でその現実を確かめた若いドン・ボスコはショックを受けた。9歳の時に見た夢が心に浮かび、その現状のために何ができるかを考えたのであろう。

ガレツリ少年との出会い

12月8日、無原罪の聖母の祝日に、

移動オラトリオ

さて、人が集まれば、その集まる場所が必要だが、数百人の若



トリノの街とアルプスの山並み。

ドン・ボスコはコンヴィット付属のアシジの聖フランシスコ教会で、バルトロメオ・ガレツリという勤労少年と出会った。すぐに彼と友達になり、次の日曜日からは続々とその友達がついてきて、次第に勤労少年の集団となった。ドン・ボスコは毎日曜日、彼らのためにミサをたて、よくわかる説教をし、正しく生きることを教え、悩みを聞き、一緒に遊び、楽しい一日を過ごした。さらに平日も空いた時間に彼らの働く場を訪れ、その状況を見て主人に会い、生活の問題を解決するように努めた。彼はこの活動を「オラトリオ」と呼んだ。

者が集まればどこからも追い出される。ミサのためならどこかの教会に集合してもよいが、遊ぶ場所は問題であった。

ドン・ボスコはこの問題を解決するために4年以上かかった。①アシジの聖フランシスコ教会とコンヴィットの庭、②バロ侯爵夫人の事業地、③鎖の聖ペトロ教会（古い墓地付属の教会の庭）、④モラッシの聖マルチノ教会、⑤モレッタ神父の家の部屋、⑥フィリッピ兄弟の庭、と次々に移転を余儀なくされた。「移動オラトリオ」の時代であった。

協力者が必要

さらに、数百人の若者を世話するには一人ではとても間に合わない。ドン・ボスコは次第に自分の周りに協力者を集めた。理解を示す神父、学校の先生、年長者の教え子たちも手伝ってくれたが、ほとんどは一時的で、長い期間は当てにできなかった。真の協働者を養成するまでには、それから長い時間が必要だった。

資金も必要

当然、お金もかかっていた。ドン・ボスコ自身の生活費だけでなく、しばしば収入のない少年を助ける必要

があったし、レクリエーションのための資金も必要だった。この若い神父の苦勞を見て、町中の親切な人が快く助けてくれたが、緊急の時には、ドン・ボスコ自身が人の助けを願っていた。

定住の地、ピナルディの家

1846年の復活祭の1週間前、長い間定住地をもたなかったオラトリオは、ついに留まる場所を見つけた。ピナルディ家の裏側の納屋だった。そこを1年3200リラで借りることになり、天井が低すぎたので床を50cmほど掘り下げてもらい、聖堂にした。初めて正式にその聖堂を使った日は、まさに復活祭の日だった。その場所で喜びに満ちた復活祭を祝った。貧しかったが、ついに追い出されないで使える場所だ。また、しばらくしてから自分が住むために家の主人から2階の3部屋を借りた。

この場所から、現代に至るドン・ボスコの大事業がスタートしたのである。

文 ●
ガエタノ・コンプリ
Gaetano Compri
サレジオ会司祭
チマッティ資料館館長

*1 9歳の時の夢／イエスとマリアが現れて、どう猛な動物たちがおとなしい羊に変わる場面を見せ、どう猛な動物たち（少年たち）の先頭に立つように、そのために「謙虚で、心強く、たくましくなりなさい」と命じられた夢。
*2 オラトリオ／ラテン語で「祈りの場」を意味するが、ドン・ボスコのオラトリオは祈りはもちろん、レクリエーション、勉強、演劇など、地域の子どもを対象としたあらゆる活動の場である。現在は「ユースセンター」とも呼ばれている。

おかえり！ ドン・ボスコの家



ドン・ボスコの学び舎の家庭的雰囲気



■ 本石美春さん

from サレジオ高専 (旧育英工業高等専門学校)



■ 本石拓也さん

from サレジオ高専 (旧育英工業高等専門学校)



■ 倉澤麻莉香さん

from 日黒星美学園小学校・中学校・高等学校



■ 野口洋一さん

from 日向学院中学校・高等学校

いまや世界で約3000校に広がるサレジオ家族の学校。そのルーツは、ドン・ボスコが母マルゲリータと共に、衣食住に事欠く若者たちを家に泊め、読み書きや祈りを教えたことに始まる。「家庭的な雰囲気」を大切にする伝統は、今も息づいているのだろうか？
ドン・ボスコの学び舎の卒業生たちが自身の体験を語ってくれた。

取材・文・写真・編集部

でした。宗教を教えてください、生徒との距離が近く、おもしろく親しみやすいシスターでした。高3の時に洗礼を受けたと相談したら、教会を紹介してくれました。

で、さりげなく声をかけてくれましたし、私たちが神父さんの愚痴を聞くこともありましたね(笑)。学校行事も堅苦しくなくて、楽しましようというような明るい雰囲気がありました。

本石(拓) サレジオ高専(旧育英工業高等専門学校)で5年間、工業デザイン科に所属し、プロダクトデザインを勉強しました。今思い返すと、先生たちは教師というよりも、身近な相談相手として接してくれた印象が強いですね。夏合宿のデザインセミナーでは、夜中まで皆で話したり、より親身に聞いてもらったり。卒業後も学校に遊びに行くような関係が続いていて、良い人たちの出会いに恵まれたと思いますね。

思い出すのは日常の学校生活の中に異文化が存在したこと。校長先生も外国の方でしたし。オーストラリアのサレジオの学校に交換留学で行った時は、初めての海外経験でしたが、一人で行ったということ度胸がついたと思います。まさか彼(拓也さん)と結婚して海外に住むとは、当時思ってもみませんでした……。

本石(美) 私もサレジオ高専でデザインを学びました。移転前の杉並の校舎(現在は東京都町田市)には、学生食堂とは別に、廃車になった地下鉄を利用したカフェがあつて、休み時間や放課後に入り浸って友達と話していましたね。そのカフェを営んでいる神父さんが、ピザトーストを焼いてくれたりし

ドン・ボスコの学校は「家庭的な雰囲気」を大切にしていますが、どんな体験がありましたか？

野口 寮は、毎日かなり厳しいスケジュールでしたが、休憩時間や土日には寮監の神父さんや神学生と一緒にギターを弾いたり、サッカーなどをして遊んでくれていました。寮という「家」にいる家族のような印象で、「神父様」と改めて言うのが気恥ずかしい感じ

距離感が近かったため、良いお兄さんが本当に近くにいるという印象でした。

— 皆さんはドン・ボスコの学校の卒業生ですが、学生生活を通して接した先生、神父、シスターたちの印象はいかがでしたか？

野口 私は宮崎の日向学院中高での6年間、学生寮で生活しました。その寮で関わる先生たちが神父さんでした。年の近い先生も多く「アニキ」的な存在で、

倉澤 私は小中高とずっと目黒星美学園で、つまり12年間を星美で過ごしました。今はカトリック碑文谷教会(サレジオ教会)の青年会で活動しています。大学入学時に洗礼を受けたのですが、そのきっかけが一人の若いシスター



「印象に残っているのは
『嘘をつかれたことが
一番悲しかった』
と先生に言われたこと」



の ぐちひろかず
野口洋一さん

1980年生まれ。日向学院中学校・高等学校卒業。現在は株式会社ティーシー・マックスに勤務し広告制作に携わる。



「そこに行くとあそこは
もう一つの家だなと
実感します」



くらさわ まり か
倉澤麻莉香さん

1992年生まれ。目黒星美学園小学校・中学校・高等学校卒業。現在は聖母大学看護学部で看護師・養護教諭を目指して勉強中。



留学生と一緒に。右端が本石美春さん。

本石（拓） デザインの勉強は授業が終わってからのほうが濃厚で、終電までやっていましたが、先生もそれに付き合ってくれました。

ひとりの関わりが密でしたから。校内にはラウンジがあつて、そこで先生とずっと話をしたり。保健室の養護の先生ともよく話をしましたが、その先生の影響を受けて、私も看護の勉強を始めました。

卒業生として星美に遊びに行くと、先生だけでなく事務の職員の方々も「帰って来たわね」という感じで、いつでもウェルカムな雰囲気があります。家のような感じで遊びに行くし、そこに行く心安けさがあります。卒業してから、あそこはもう一つの家だなと実感します。

がします。当時は愛称で呼んでいましたから。

親元を離れて中学に入った時はいろいろと不安で。初めて一人で病院に行くという同級生が不安がついてると、先生が「じゃあ、病院に行くシミュレーションをしてみようか」と練習したこともありましたね（笑）。テスト前などは勉強のことが不安で、朝の3時とか4時に寮監を起こしてわからないところを質問しても、嫌な顔せず毎回根気よく付き合ってくれました。

一昨年、寮がなくなったのは残念ですが、学校にはあの頃にお世話になった先生方が今もいらつしゃるので、今でも日向学院に遊びに帰ると、家族がいつでも待っていてくれて、迎え入れてくれるように思えます。



野口さんが在学中の頃の日向学院学生寮にて。左下が野口さん。その右隣は現校長の濱崎神父。

印象に残っているのは、あることで怒られた時に「やっけないと嘘をつかれたことが一番悲しかった」と先生に言われたこと。自分たちはバレンければいいと思っていたが、先生たちは互いの信頼関係の上に成り立つ空間を作ろうとしていたのだと後になって思いました。

倉澤

学校の「家庭的な雰囲気」は卒業した後が一番感じましたね。卒業して同じ年代の学生たちと接して感じるのは価値観の違いです。12年間、ドン・ボスコの精神で先生たちが愛情をもって育ててくれたわけですが、それが身にしみ込んでるんですね。12年間の生活が居心地良かったなと感じます。良すぎたのかな（笑）。先生との距離は近かったし、少人数制で先生と生徒一人



目黒星美学園中高の養護の先生と高校時代の倉澤さん。

デザインのみならず部活との両立や就職の悩みなど、普通の高校生だと親にするような相談を先生にしていました。

卒業した今でも関係は続き、遊びに行ったり相談したりしています。また同級生とも今でも付き合いますが、このような関係が築けているのは「家庭的な雰囲気」を継承している学校の影響が大きいと思います。

本石（美）

高専の就職活動は20歳ですから、4年制の大学生とはデザインなどの技術で2年の差があります。でもそのことに負けなように教えていただいたように思います。先生たちは遅くまで残って、根気よく教えてくださいました。

本石（拓）

サレジオ高専のモットーは「神は愛なり、技術は人なり、真理は道なり」です。当時はあまり意識しませんでした。今思い返すとそういった信念のもとに先生方は愛情をもって接してくださっていたのかなと思います。デザインの仕事において、技術者やプランナーと一緒にやることにな



「勉強、部活、
就職の悩みなど、
親にするような相談を
先生にしていました」



もといし た く や
本石拓也さん

1980年生まれ。サレジオ高専（旧育英工業高等専門学校）工業デザイン学科卒業。現在はソニー株式会社クリエイティブセンターに勤務し、製品デザインに携わる。2児の父。



「神父さんがピザトーストを
焼いてくれたりして、
私たちが愚痴を聞くことも
（笑）」



もといし み はる
本石美春さん

1980年生まれ。サレジオ高専（旧育英工業高等専門学校）工業デザイン学科卒業。ジュエリーデザイナーとしてヴァンドームヤマダに勤務し、本石拓也さんと結婚後、夫の海外赴任を機に退職。2児の母。

孤児園の 子どもたちの 父と母

文 ● 中田鈴雄



戦後のドン・ボスコ学園（現 聖ヨゼフ寮）の子どもたち（1953 年撮影）。中央の白いひげの男性がチェケッティ神父。

家

族——切っても切れない血のつながり。信頼と
いつくしみに満ちた絆、
幸福の源泉。

家族——何と温かく、やさしい響きをもつ言葉でしょうか。愛の泉。終戦後の孤児園（院）に育った当時の私たちにとって、家族、家庭は意識の外にあり、身近な問題ではなかったような気がします。

昭和20年3月、私の一家7人は大阪の大空襲で焼け出されて離散、母の死、父の病氣（その後死去）で昭和22年2月、5歳の私と2歳の弟は大阪の聖家族の家（聖ヴィンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会）に預けられました。昭和28年、サレジオ会のドン・ボスコ学園（現聖ヨゼフ寮、大分県中津市）に転園、中学卒業後、特別のはからいで大阪星光学院に学費免除で進学させていただきました。

孤児園の仲間の多くは家族・親戚を知らず家庭を知りません。戦争で、空襲で親を失った子ども、預けられた親戚の虐待から逃げ出して自ら浮浪児となり、浮浪児狩りで収容された子ども、親の病氣や貧困で養育されなかった子ども、また親から遺棄された子どももいま

した。施設で名前と誕生日をもらい、戸籍を作られた子どもも少なくありません。いろいろな事情があるにせよ大人たちはそれを知らず、気づけば施設の子どもになつていたというのが実情です。

在園当時、親子連れを見て「いいなあ」と思うことはあっても、家族を意識するのは中卒後、社会に出てからです。周りに家族や家庭の話があられている中で、自身の出自が気になり、また孤独感と寂しさが募ります。家系やルーツ探しがブームになった時など数年がかりで親探しをした人も1人や2人ではありません。結婚話の時など「孤児園出にロクな奴はおらん」「どこの馬の骨かわかん奴」と非難されながらも自ら家族を作り、家庭を築いてきました。一方すべての過去を封印して行方不明になった人も多く、自ら死を選んだ人も忘れられません。お世話になったシスターや神父様方、その思い出も60年前のこと、ほとんどの方が帰天されました。

聖家族の家のシスター・カッタン院長のやさしさに母を想います。ドン・ボスコ学園のチェケッティ神父様に空腹や開塾作業の苦しさを訴えた時に、慰めと励ましをいただきました。

中田鈴雄 なかた すずお

1941 年生まれ。戦災により、大阪「聖家族の家」、大分「ドン・ボスコ学園（現 聖ヨゼフ寮）」の孤児院（現 児童養護施設）に育つ。27 歳で印刷会社を創業。現在、山形県鶴岡市在住。桜田鈴雄の名で『戦災孤児の 60 年 孤児院に育った子供達の記録』を出版。



中田鈴雄さんの著書『戦災孤児の 60 年』を 10 名の方にプレゼント！
詳しくは本誌巻末「読者プレゼント」のコーナーをご覧ください。



本石さん夫妻と長男の真（まな）くん。

——後輩に伝えたいこと、先生たちに願うことは？

野口 寮で、ある意味無理矢理に、さまざまな人間関係に揉まれながら皆一緒に生活してきたのは大きな経験です。そして寮監の先生が常にそばにいて、ゆるやかに導いてくれることで、上手な人間関係の作り方を自然に学べたのかなと思います。今でも当時の寮生たちと連絡は取り合っていますし、先生が東京に来られた際は、皆で声をかけて集まったりしています。

りますが、良い関係を築きながらチームワークでやっていかないと良いモノはできないと信じていて、それは学校での経験が活かされているのではないかと思います。

本石（拓） 学校で培った人間関係は社会人になっても活かされています。それを経験させてくれた両親や学校とその環境、また先生や友達にはとても感謝しています。

後輩の皆さんに伝えたいのは、嬉しいこと、悲しいこと、悩みないろいろなあると思いますが、包み隠さず身近な人にオープンにして、相手を頼ったり、たまにはけんかしたりしますが、深い信頼関係を築くことです。モノ作りも家庭も一緒に自分がつくるものだから、それはとても大切なことだと思っています。

本石（美） 思春期の5年間は縦も横も密な関係で、社会に出てからもそれは続いています。それはこの学校ならではのと思っています。他の学科の人たちとも出会ってつながりを深めていき、それを社会に出てからも活かせたら良いと思います。

本石（拓） たしかに絆は今でも強いですね。卒業してからも学校にはなぜか行きたくなる。そこには人がいるから。学校に行くというよりは、人に会いに行く感じです。



この建物の3階にドン・ボスコの居室とオフィスがあった。

野口 先生たちには、より近い距離感でどんな生徒たちと話をしたいし、接してほしいですね。先生からも、そして生徒からも互いに距離感を詰めて、僕らが体験したような、良い関係を築いてもらえたらと思います。

倉澤 学校の家庭的な雰囲気は

ずっと変わらないでほしい、それだけです。いつか母校に戻って子どもたちに教える立場として関わっていったらと願っています。卒業して思い返すと、本当に学生時代は楽しかったなと思います。先生に怒られることもあるかもしれませんが、そんな学生生活もぜひ楽しんでください。



At Home@Don Bosco

働く子どもたちのオラトリオ*

ドン・ボスコのオラトリオは当初、「祝祭日オラトリオ」と言われていて、活動は土日や祝日に限られたものでした。祝祭日になると子どもたちはドン・ボスコのオラトリオにやってきて1日活動をして、自分の寝床のある場所（それがあんならば…）に帰っていったのです。

当時来ていた子どもたちの多くは「靴製造、左官の仕事、漆喰塗り、道路舗装などに従事している子ども

たち」で、「いずれも遠隔地の出身」

だったようです（『ドン・ボスコ自叙伝』より）。休みになって暇になるといろいろ問題を起こしていた少年たちを集めて、最低限の教育をしてあげるこれが目的だったのです。ただ、ドン・ボスコは週日も、職場や工場に行つて彼らを訪ねて回りました。

毛布を持ち逃げされる

ドン・ボスコが26歳の1841年12月に始めたこの祝祭日オラトリオ

文 ● 浦田慎二郎

Essay

家庭的な寄宿学校 ドン・ボスコの教育の原点



トリノのドン・ボスコの学校。

オラトリオのベッド第1号

しかし、そこでめげないのがドン・ボスコです。1847年5月のある雨の降る晩のこと、もう夜も遅い時間に、一人のびしょぬれになった少年がピナルディの家のドアをノックしました。食べ

物も、寝る場所もなかったのです。とりあえず彼を中に入れ、火にあたらせて食べ物を与えて、彼の身の上話を聞きます。そして最後には台所の床にレングと板とわらで即席のベッドを作り、彼を寝かせてあげました。「オラトリオのベッド第1号」と「オラトリオに寝泊まりする少年の第1号」です。

この出来事をきっかけとして、ドン・ボスコのオラトリオは新しい形になっていきます。祝祭日だけのオラトリオから、すべての生活を共にするオラトリオ、まさに「家庭的な教育環境」としてのオラトリオにです（もちろん、すでに祝祭日オラトリオはドン・ボスコを中心とした家庭的な集まりでしたが）。

マンマ・マルゲリータ

実はそこに決して見逃せない人物がもう一人いました。ドン・ボスコのお母

のです。

マルゲリータがただ単にしつけを施すだけの人ではなかったことは、ドン・ボスコの次の言葉から明らかにあります。「母は心底私を愛してくれていました。私も母に限りない信頼を寄せ、何もかも相談していました。母は私のすることをすべて知り、見守り、許可してくれていました。その上、必要なものは快くあてがってくれていたのです」。



このようにマンマ・マルゲリータから小さい頃から真の教育者としての生き姿を学んできたドン・ボスコが、見捨てられた貧しい少年たちを前にして彼女が自分にしてくれたように彼らを導いたことは不思議ではありません。彼女が自分を愛してくれたように、少年たちを愛して導いてあげること、彼女が自分の家で教育してくれたようにオラトリオという家庭で少年たちを教育してあげること、これは理論ではなく、生きた実践から学んだ知恵だったのです。

さん、マンマ・マルゲリータです。彼女はその半年ほど前の11月からドン・ボスコと共にヴァルドッコに故郷から移り住んでいました。自分で望んだことではありません。故郷では孫たちと一緒に幸せな毎日を過ごしていたのですから。そうではなく、しばらく重い病気の療養のために故郷で静養していたドン・ボスコに頼み込まれたのです。そのとき彼女は「それが主のお望みだとお前が思うのなら、私はすぐにでも参りますよ」と答えたそうです。そんなマンマ・マルゲリータがドン・ボスコと共にいなければ、彼の「家庭的な教育環境」の実現もなかなか難しかったかもしれません。

実際、この最初の少年の場合も、彼女がそこに泊めることを提案し、ドン・ボスコがそれに対してどちらかという躊躇した様子が彼自身の話からは伺えます（『ドン・ボスコ自叙伝』より）。マルゲリータはドン・ボスコに「明日のことは神さまにおまかせして」と話し、ドン・ボスコは「お母さんのいいようにしてください」と答えるのです。

共にいて、導いていく

その後のマンマ・マルゲリータのこの少年に対する行動はドン・ボスコの教育の理想が凝縮されたものです。まず彼女は「少年と一緒に外に出て」レ



ピナルディの家の模型。

子どもたちを守り抜く決意

ドン・ボスコは1歳半のときに父親をなくしています。マルゲリータは再婚せずに、女手一つで息子たちを育てました。実際にはよい再婚話があったのですが、彼女はそれを断っています。当時女性が再婚するということは子どもたちをだれかの手に預けるということでした。ですから彼女はこう言うのです。「私はこの子どもたちの母親なのです。たとえ、全世界の金と引き換えにでも、私は絶対に子どもたちを手離しません」。

この言葉は将来のドン・ボスコの姿を予見します。どんなことがあってもオラトリオの少年たちを守り抜くという教育者・司牧者としての姿です。

心底愛してくれた母の愛をもって

ドン・ボスコはこう語ります。「母の一番の気遣いは、息子たちに宗教教育を施すこと、従うようにしつけること、それから年齢に合った仕事に精を出すように仕向けることでした」。実際、ドン・ボスコが子どもだった頃「祈りを教えてくれたのは母自身」だった



ピナルディの家にマンマ・マルゲリータを連れてきたドン・ボスコ。

【注】* オラトリオとは元来「祈る場所」という意味だが、ここでは「子どもたちが集まって宗教・一般教育、娯楽行事、種々の青少年活動を行っていた場所」という意味。

浦田慎二郎
うらた しんじろう

サレジオ会司祭。教皇
庁立サレジオ大学大学
院霊性神学博士課程修
了（神学博士号取得）。
専門はドン・ボスコ研究。

言いつきますけど...



今回の「言いつきますけど」人

下崎 優子

(イエスのカリタス修道女会 修道女)

強く、たくましく、
ワイルドになってください！

下崎 優子 しもさき ゆうこ

イエスのカリタス修道女会 修道女
2012年より南スーダンへ
宣教女として派遣される

東日本大震災の約1か月後、私は被災地へ足を踏み入れました。町は消え去り、戦争の後のような状態に、ただ立ちすくんでしまいました。

その9か月後、今度は長く戦争の続いたアフリカ・南スーダンに宣教女として派遣されました。サレジオ家族が任された場所は、かつて南スーダン解放軍が駐屯していたグンボというナイル川のそば。森は爆撃によって焼き払われ、砂漠のような大地が広がっていました。他の場所へ逃げていた人々が戻ってきて、教会の周りに住み始めています。

東北の被災地と南スーダン、2つの大

地に立つて感じたこと、それは「人間は強く、たくましく、ワイルドに創られたものである」ということです。人間は、自然と共存しなければ生きていけない。生きるために、人間に与えられた力を使おう。手を使って土を掘ろう。足を使って歩こう。頭を使ってどうしたら物が作れるのか考えよう。笑顔で人を励まそう……。文化的な物が破壊され、「人間と大地」という原点に立たされた時、神さまが私たちに与えてくださった心と体こそが、再生への道を開いていくのです。

若者の皆さん、若いうちにたくさん

の苦勞を自分から探してやってみてください。大自然の中で自然のサイクルを観察してみてください。スーダンの子



どもたちは、土を掘ってネズミを捕まえ、木に留まった鳥や木の実を石投げひもで撃ち落として食べます。すさまじい砂嵐の中でも、若者たちはサッカーに夢中。空にトンビが飛んでいれば、近くに蛇がいることを察知……。自然と共に生き始めると、もっと生きている意味が深くなります。

若者の皆さん、あえて不便な生活をしてみてください。やる気がない！人生に疲れた！もう死にたいと思っている人がいたら、快適な生活を捨てて、自然の厳しさの中で生きてみてください。生きる力が湧いてくるはずですよ。

家

庭から虐げられ、自分の居場所がわからず犯罪者となった少年たちに迫るノンフィクション。現場での取材期間は10年。「殊更に熱く、必死で、そして『弱かった』少年たち」(著者の話である。本気で仲間をかい守る彼らの友情は熱い。彼らは「何を考え、何を愛し、憎み、何を食べて、どんな生活を送っているのか」。巨額の富を手に入れた後も居場所を見つからず、自分へのご褒美はファストフード店の牛丼。この落差に、彼らの真の姿を垣間見るようだ。それぞれの場で私たちのあり方を見直すために勧めたい本。(雨宮泰紀評)



家のない少年たち
親に望まれなかった少年の
容赦なきサバイバル

鈴木大介

2011年 太田出版

261頁 1680円

近

いからこそ愛情が湧くが、近から傷つけあつてしまふ。家族にはそれぞれに何らかの傷といえるものがあるだろう。しかし、家族がその傷の真の原因を探ることはほとんど不可能に近い。それに触れずにいつまでも痛みとして持ち続けるか、あるいはこの4つの短編の登場人物のように、あえてその傷を凝視し、新たな意味づけを与えて乗り越えようとするか。家族のメンバーのそれぞれの「私」が、それぞれ何かを卒業することによって、家族は再生へかすかな希望を見いだすのだろう。「まゆみのマーチ」は一押し。(関谷義樹評)



重松清
2006年 新潮文庫
404頁 662円

卒業

カトリック・サプリー
人生を活性化する
25錠

竹下節子 2012年 ドン・ボスコ新書
203頁 777円



わたしがママのことでよかった？

リサ・T・バークレン 作
ローラ・J・ブライアント 絵
松波史子 訳 2001年
いのちのことは社フォレストボックス
33頁 1575円



最

新刊『キリスト教の真実』(ちくま新書)が話題の著者による「カトリック生活」での人気連載が新書に。著者はフランスに在住、比較文化の視点から評論・執筆・演奏活動と多才に活躍中。「四次元の思考回路から湧き出してくる」(金子賢之介師)自由な発想で、豊かなエピソードを縦横無尽に紡いでゆく。ボンと差し出される処方箋に、慰められ、元気づけられ、視界が開かれ、まさに「人生を活性化」するサプリーだ。社会の中でキリスト教的に生きる、信仰と理性、生き方に自信がない、祈れない夜、愛といのちなどをテーマに、粒よりの25のエッセイを収録。(編集部評)

「マ

マ、パパ、わたしはどこからきたの？」

子どもはいつか必ずこういう質問を親にしてくる。やがて比較することを経験した子どもはこんな質問も。「わたしがママのことでよかった？」このしろくまのママは確信をもって、こぐまのルルに答える。「かみさまのところからよ」「ルルがママのことで、ほんとうによかったわ」「だって、ルルは、かみさまから、パパとママへのおくりものだもの」親の確信は子の確信になっていく。親が確信し安定しているとき、子はそれをしっかりと感じ取っていくのである。親子で読みたい1冊。(関谷義樹評)



ローマ

サレジオ会第27回総会 2014年開催の招集

2012年の復活の主日、4月8日付の書簡で、サレジオ会のチャベス総長は2014年2月に開催される第27回総会を招集した。今後2年近くをかけ、全世界のサレジオ会員が参加して総会のテーマ「福音の徹底した生き方のあかし人・ドン・ボスコのモットー『仕事と制約』を忠実に生きるために」を実現するため、振り返りと分かち合い、祈りの歩みが始まる。特に2015年のドン・ボスコ生誕

200周年に向かう歩みと重なり、創立の精神に立ち帰り、ドン・ボスコの精神への創意と忠実さをもって現代の挑戦に応えることができるよう、修道会の刷新を目指す。総会の公式ロゴマークも発表された。各大陸を表す5人の若者に囲まれたドン・ボスコが指差す2冊の本は、サレジオ会奉獻生活の真正さと徹底した生き方の源泉である、福音書と会憲を表し、総会のテーマを表現している。赤とオレンジの2つの色は、福音を生きるためにドン・ボスコが示した、仕事と節制の道を示している。



サレジオ会第27回総会の公式ロゴマーク

スペイン

ドン・ボスコお帰りなさい！

アフリカ諸国を巡ったドン・ボスコの聖遺物は、2012年5月1日、スペイン、バスクのサレジオ会ビルバオ管区に到着。19日にはガリシア地方のレオン管区へ、巡礼地サンティアゴ・デ・コンポステーラも訪れ、6月6日にはマドリッド管区へ。ス



ビルバオで



サンティアゴ・デ・コンポステーラで



マドリッドで

ペイン巡礼のモットーは「お帰りなさい」。ドン・ボスコは歌や踊りで迎えられ、教会や共同体、チャベ

協力の枠組みを作りはじめた。マドリッドの宣教事務局はさまざまな国際機関に呼びかけ、マリノの事態に目を向け救援に動くよう、連帯を訴えている。

モンゴル

扶助者聖母に捧げられた 新しい教会

モンゴルのカトリックの宣教が始まって20周年を記念し、2012年5月31日、ダルカン市で、扶助者聖母に捧げられた教会が献堂された。当日は、教会の信徒が早朝から飾りつけ、聖歌の練習、祈りをして準備。主司式はウランバートルの教区長バディラ司教。サレジオ会ベトナム管区長ホン神父（モンゴルはベトナム管区に所属）、ダルカンの院長・主任司祭レウン神父（中国管区出身）のほかの司祭たち



モンゴルで扶助者聖母に捧げられた教会の献堂式

ルやカテドラル、家庭に迎えられた。『自叙伝』や「ローマからの手紙」の朗読、ビデオ上映、ドン・ボスコの夢が語られ、ドン・ボスコの言葉のリーフレットが配られた。サレジオ会共同体は聖遺物の前で創立者のとりなしを祈り、誓願を更新し、分かち合いの時をすごした。マドリッドのサレジオ学院では中庭を埋め尽くした生徒たちが「お帰りなさい！」と歓呼の声を上げると同時に門が開き、聖遺物が到着、みことばの典礼が行われた。マドリッド大司教のロウ・枢機卿は「ドン・ボスコは若者の牧者でした。ドン・ボスコは若者たちをイエスのもとへ連れて行きたいと願いました。イエスだけが彼らを幸せにできると知っていたからです」と語った。

ハイチ

ドン・ボスコ技術訓練学校が開校

2012年5月7日、ハイチのサレジオ会共同体は、フォール・リベルテのドン・ボスコ・ポリテクニク・センターの一角に技術訓練学校を開校した。昨年の大地震により甚大な被害を受けた地域での学校の開設は、大きな一歩となる。

開校式には、ハイチのマルテリー大統領、教育相、職業訓練担当局長をはじめ、政府・行政の要人も参列。同校は、水力、石材加工、

が共同司式し、香港からのサレジオ会員や恩人も参列。司教は聖母訪問の祝日にちなみ、新しい教会の献堂について「神がご自分の民を訪れます」と語った。説教に続き、9人の若者が堅信の秘跡を受け、2年の準備を終えた10人の信徒がサレジオ・コオペラトリーとして約束を立てた。引き続き、祭壇と教会全体の奉獻が行われ、6人の共同司式者たちが教会の6つの柱を祝福。

ホン管区長はミサの終わりに、司教をはじめ、教会建設とダルカンのキリスト者共同体の設立に携わったすべての人に感謝し、カトリック共同体20周年を記念するモンゴル風の扶助者聖母像が司教と来賓に贈られた。

「シ」民主共和国

内戦のゴマの状況

コンゴ民主共和国のゴマでは、数か月前より北キウ地方の資源を巡り外国勢力が介入、内戦が激しさを増し、数日で1万5千人の避難民がゴマ郊外に押し寄せている。

ゴマのサレジオ会のカヴィオリ神父は、キャンプ内の栄養失調の子どもたちのうち特に深刻な状態だった7人をセンターに収容し、治療しているという。親を失い保護される子どもも増えている。教区



カリタスの指導の下、栄養センターの再開が試みられている。ドン・ボスコ・センターには、戦闘が激しくなったルチュルのカリタスから



ゴマの避難民の多くは子どもと女性、お年寄り

委託された、元少年兵の18人の少年と1人の少女も身を寄せている。ドン・ボスコ・センターが世界食料計画WFPの援助によって行っていた学校の生徒たちへの給食は、WFPの食糧が底をついたため停止。戦闘によって農産物の価格は上昇し、手に入りにくくなっている。センターは人種・部族・宗教にかかわらず、助けを求める人々にできる

と教会の司祭に従い成人になるまで待ち、サレジオン・シスターズに入会。第1次世界大戦中に陸軍病院で赤十字の看護師として働いた経験が、後にアマゾン熱帯雨林で働くために大いに役立った。

1922年、エクアドルに派遣されたシスターは、ほかの2人のシスターと共にシユアルの人々のために働き、密林での想像を絶する多くの苦勞を捧げながら福音を伝えた。シスター・マリアの「奇跡」と言われたマカス、セビージャ・ドン・ボスコ、スクアの事業は、今も活力にあふれている。シスターは1人で看護師、外科医、歯科医、麻酔医などの役をこなしたが、何よりも福音を告げる人であり、あふれる信仰、忍耐、兄弟愛をもって人々の友、姉妹、母となった。シユアルの女性のための活動を通して、何百もの新しいキリスト者の家庭が生まれた。植民者とインディオの人々の和解のために命を捧げていたシスター・マリアは1969年8月25日、飛行機事故によりスクアで亡くなり、「私たちのマードレシータ（お母さん）を失った」と多くの人が別れを悲しんだ。

2012年5月10日、エクアドル人女性の病からの回復が列福のための奇跡として正式に認定された。幼い5人の子どもの母であるホセファ・ピスコさんは2002年、重篤なマラリアにかかり、数日の命と

だけのことをしようとしているが、先は全く見通せない。「人々にどうして生き延びることが難しくなると思われます。どんな小さなことでも、助けてくださるならありがたいです」とガヴィオリ神父は語る。

韓国

フィギアスケートの女王
南スーダンを応援

2012年6月2日、バンクーバー冬季五輪フィギアスケートの金メダリスト、ステラ・キム・ヨナさんがソウルのサレジオ会管区長館を訪れ、南スーダンに100の小学校を建設する企画の賛同者に名を連ねた。このプロジェクトはドナーティ神父が呼びかけ、サレジオ会が立ち上げたもの（『ドン・ボスコの風』8号参照）。



キム・ヨナさんに扶助者聖母の絵を手渡すドナーティ神父

宣告された。この家族の窮状を見かねたサレジオ会のセガラ神父が、シスター・マリアへのノヴェナを提案し折ったところ、予期せぬ回復が始まり、まもなく完治した。

「十字架に目を上げると、働く力と勇気が与えられます」と語り、人々のためにたゆみなく自分を与え続けたシスター・マリアの力の源は、この確かな信仰だった。

ローマ

「サレジオ会会報」編集者の
国際会議開催

3年に1度行われる「サレジオ会会報（Salesian Bulletin）」編集者の国際会議が2012年5月17、19日、サレジオ会ローマ本部にて開催され、世界42地域から約50人が参加。「ドン・ボスコの風」と題して発行している日本からも広報・出版担当者の浦田慎二郎神父と立石光洋氏が出席し、編集者の交流・懇親も深めた。

「サレジオ会会報」はドン・ボスコが1877年に創刊、サレジオ会精神を広め分かち合うことを目的に、現在は世界で56エディション（版）発行されている。これらの版を合わせて1つの「サレジオ会会報」であり、編集長はサレジオ会総長が務めている。

会議では、まず制作の現状と課

◆南スーダン100校プロジェクトのため
ご寄付のお願い
下記の振込口座まで（または本誌とじ込みの
払込用紙にて）ご寄付をお願い申し上げます。
郵便振替
口座番号 00100-7-412947
加入者名 「ドン・ボスコの風」編集事務局
※通信欄に「南スーダン100校プロジェクトの
ため」と明記してください。

「私にできることがあれば、喜んで南スーダンの子どもたちを助けたいです。アスリートとして、将来教師になる人間として、すべての子どもにとって教育が大切だと承知しています」とキム・ヨナさんは語った。

ドナーティ神父はバビルスに描かれた扶助者聖母の絵と「美しき青きドナウ」のアーティオン演奏をキム・ヨナさんにプレゼントした。

スーダンのドナーティ神父とコミノ修士は資金集めのため、かつて20年以上宣教師として働いた韓国を訪れた。ドナーティ神父の手紙で呼びかけられた各界の著名人が支援を申し出ており、キム・ヨナさんもその一人。

キム・ヨナさんは2018年冬季五輪の招致活動のため、昨年夏アフリカを訪れ、強い印象を受けたという。直接話を聞きたいと訪問、6万USDを寄付した。これは1つの学校の建設費に相当する。

「あなたは世界中の子どもたちのお手本ですが、これは子どもたちに夢を与える本当の教育です。あなたは愛の女王になられました。学校ができあがったら、どうぞ子どもたちに会いに来てください」とドナーティ神父は感謝した。



世界42地域から編集者が集まった会議の様子



『サレジオ会会報』は世界56エディション（版）発行



チャーベス総長を囲む参加メンバー

「私にできることがあれば、喜んで南スーダンの子どもたちを助けたいです。アスリートとして、将来教師になる人間として、すべての子どもにとって教育が大切だと承知しています」とキム・ヨナさんは語った。

エクアドル

シスター・マリア・トロンカッティ
11月24日列福



シスター・マリア・トロンカッティ

サレジオン・シスターズのシスター・マリア・トロンカッティの列福式が、2012年11月24日にエクアドルのマカスで行われる。教皇代理として、列聖省長官アマート枢機卿が式を執り行う。

シスター・マリア・トロンカッティは1883年2月16日、北イタリアに生まれた。畑で働き、弟や妹たちの世話をしながら、大家族の中で両親の温かい愛情に包まれて育ったマリアは、幼いころから修道女への道に心ひかれていたが、父親

題を分析し、多くの信徒が編集に携わっていることを評価。キリスト、ドン・ボスコ、サレジオ会の精神を特に若者に伝え、会報を通じて皆がドン・ボスコの友となるように、さらに努めていくことを確認した。具体的には、より親しみやすい文章、表現、良質なデザインを追求し、写真や映像を多用すること、豊富な世界各地のニュース資源を共有し活用することなどについて、各地の事例発表をふまえ議論を深めた。

インターネットの活用については、誰でも記事など情報を投稿できる双方向コミュニケーションのシステムを導入した事例や、タブレット型端末やスマートフォンで閲覧できるアプリケーション開発の事例など、特に中央アメリカ、ブラジル、アルゼンチンから先進的な取り組みが紹介された。

「サレジオ会会報」は、会員、サレジオ家族、卒業生、各管区のさまざまなプロジェクトのコミュニケーションを活性化させる役割を担うことを再確認し、ドン・ボスコ生誕200周年の準備を促し、インターネット版の開発・発展に積極的に取り組むよう結論づけられた。

また、サレジオ会は代々バチカンの公式な新聞発行の事業を委託されているが、研修プログラムの1つとして、バチカンの新聞社オッセルバトーレ・ロマーノのオフィスと印刷所を視察した。

DBの

★ 教え子たち ★

本誌の連載「時を超えて紡ぐショートストーリー」でおなじみのノゾエ征爾さん。今年3月、演劇界の芥川賞といわれる「岸田國士戯曲賞」を受賞。演劇界で大注目のこの人に登場していただいた。

★★★★★

— 現在の仕事を教えてください。 —

脚本家（劇作家）、演出家、そして俳優です。舞台脚本は、自分の劇団では10年以上ずっと書いて、他からも依頼されて書いたり、

ラジオドラマなどもよく書いたりしました。他に、映画の脚本や、若者向けの雑誌にエッセイやコラムなども書いたりしています。同時に、舞台の演出家もやり、俳優も、舞台やドラマや映画などでやらせてもらっています。

— 脚本などのアイデアはどこから？ —

実験がベースになっているものもありますし、もちろん完全なる空想もあります。生活するなかで見聞きしてきたものや、周囲の誰かをモデルにしたり。普段から、つねに作品のネタを探しているというか、

なんでもすぐに作品に直結して考えるようになっていたので、仕事と遊びの境がない感じになっていますね。でも、苦ではないです。やっぱり好きなんだと思います。

— 仕事の喜びは？ —

舞台で好きなのは、表現する側もお客さんも、時間や温度やその場で起きていることを全て、同時に体感できるところ。何を感じるかはもちろんそれぞれで違いますが、同じ空間での共有感や一体感が好きです。自分たちが必死で模索したものをお客さんが喜んでくれた日には、その嬉しさといったら代えがたいもの



すらりとした長身。特技は英会話、ギター系、球技系、踊ること、趣味は料理。

脚本家・演出家・俳優
No. 6 ★ ノゾエ 征爾 さん

★ サレジオ歴 ★ サレジオ学院中学校・高等学校卒業

プロフィール

1975年生まれ。8歳までアメリカで育つ。サレジオ学院中学校・高等学校卒業。青山学院大学在学中より劇団「はえぎわ」を主宰。脚本家、演出家、俳優として、舞台、映画、テレビ、ラジオ等で活躍。2012年、『〇〇トアル風景』で岸田國士戯曲賞受賞。現代社会における人間の生き様に真正面から向き合いつつ、そのユーモアあふれる温かな視点と、役者や空間を活かす豊かな演出が魅力。本誌でもショートストーリーを連載中。劇団はえぎわ <http://haegiwa.net>



劇団はえぎわの稽古風景。ノゾエさんの的確な演出指導で、俳優たちは作品の世界をいきいきと表現していく。

「ハートが動く
ということ」を
大事にしたい」



サレジオ学院中学校・高等学校

神奈川県横浜市都筑区南山田 3-43-1
www.salesio-gakuin.ed.jp

があります。劇団の活動とは別で、ここ数年、毎年10か所ほど高齢者施設で劇の巡業をしたりもして、意識もはつきりしなかったような方が、泣いたり笑ったりして喜んでくださる。こつちが逆に感動して泣いてしまいくらいになる。演劇には何かそういう、人の心を動かす力があるんですよ。

— いつからこの世界に進もうと思ったのですか？ —

大学で演劇を始めてからです。大学入学時に、新人生歓迎公演というのをすごく小さい劇場で観て、初体験のゾクゾクを感じて、こんなにゾクゾクしたものをやってみないのには嘘だ！と思って、演劇部に入りました。何もかもが新鮮で、すぐにめり込んでいきました。後に「はえぎわ」を立ち上げた当初も、これを職業にするんだという覚悟があったわけでもなく、ただ、やりたいという衝動だけでした。

— 創作するなかで大事にしていることは？ —



劇団はえぎわの稽古風景

— 中高時代をサレジオで過ごして培ったことは？ —

思春期の6年間を過ごしたわけ

ハートが動くということを大事にしています。心がビビッと動くところにいたい。そういう行動、表現をしていたい。安全な道、安住はしたくないです。作品としては、完璧ではないこの世の中で、それでも一生懸命に生きていく人たちに愛情いっぱいに描きたい。笑いにもこだわりたいです。

— 中高時代をサレジオで過ごして培ったことは？ —

思春期の6年間を過ごしたわけ

ですから、絶対的なルーツになっていますね。あまりに多すぎて、言葉では言い表しきれないです。（川崎にあった）鷺沼校舎のことはすごく思い出します。サレジオで過ごした友達や場所は、自分の立ち帰れるトコロなのかなと思います。いまでも皆よく公演を観に来てくれます。会うとやはり格別に嬉しいです。

— 後輩にメッセージを。 —

いろいろな規制もあり、悩みや不安もたくさんあると思います。そのなかで、一つでも二つでも自分が夢中になれるものを見つけれられるといいなと思います。なんでもいいんです。友達と遊ぶことでも、部活でも、小さな趣味でも、もちろん勉強でもいいと思います。最も純粋で熱い気持ちがある年頃なのだから、それを大切にしてほしいと思います。夢中



「〇〇トアル風景」より 撮影：梅澤美幸

ありがとう

文・ゾエ征爾 絵・おむらまりこ

登場人物
母（77歳）
娘（44歳）

某月某日。

娘は母に話しかける。

娘「お母さん、マキだよ？ マキだよ？ お母さん、分かる？ マキだよ？ あれ一緒に行ったじゃない。覚えてる？ 読売ランド。小学校の時、連れて行ってくれたじゃない。ゴーカートに乗って。私が後ろの車で、お母さんが前を走って。私がアクセルとブレーキを間違えて、衝突して、お母さんムチ打ちになったじゃない。覚えてる？ 覚えてるよねえ？ あの時はごめんね。お母さん、ねえ、お母さん。マキだよ？ あれ、面白かったよねえ？ 箱根のそば屋さん。車で行って、一方通行で、グルッて回っても一方通行で、結局辿り着けなかったよねえ？ 覚えてるでしょ？ あのそば、食べたかったねえ？ 今度食べに行こうねえ。お母さん、マキだよ？ お母さん、マキだよ？ お母さっ……」

某月某日。

娘は母の手をひいて散歩をする。

娘「お母さん、マキだよ？ 分かる？ マキだよ？ マキの手だよ？ ほら、薬指、高校の時、バレー部で脱臼して曲がっているの。私が泣いていたら、薬指が曲がっているのもマキの立派な個性だって言ってくれたよね？ ほら、マキの個性の手だよ？ ほら、見て、田中屋さん閉店したんだよ？ 魚屋さん。覚えてる？ 田中屋魚屋さん。ほら、頭が見事にハゲあがっているご主人の。ご主人の足腰が弱くなっちゃったんだって。それでお店閉めちゃったんだって。今度からお魚どこで買おうかねえ？ 困ったねえ。おいしいお魚が食べられないね。お母さん、お母さん。お母さんウンチ踏んだ？ 踏んだねえ。犬の散歩する人、ちゃんとしてほしいねえ。後で洗おうね。この先のタコ公園で洗おうね。タコ公園分かるよねえ？ 大きなタコのすべり台の。ショウイチロウが5歳の時、すべり台から落ちて腕を骨折した所。覚えてる？ お母さんが、クレイマー・クレイマーのダスティン・ホフマンばりにショウイチロウを抱っこして病院まで

走ったじゃない。覚えてるでしょ？ ショウイチロウ、分かるでしょ？ 息子だよ？ マキの弟だよ？ お母さん、マキだよ？ お母さん、ねえ、お母さん。お母さっ……」

娘は泣いた。

某月某日。

娘は変わらず母の手をひく。

娘「お母さん、マキだよ？ 覚えてるよねえ？ マキ。お母さんがお腹を切って産んでくれたマキだよ？ お母さん、母、娘だよ？ マキとお母さんは、母、娘。わかるでしょ？ お母さんのお母さんは、私のお婆ちゃん。私の息子はお母さんの孫。ステキだねえ。つながっているんだねえ。どの命も何億年もつながっているんだねえ。神秘だねえ。

お母さん、雨だねえ。分かる？ 雨。雨、嫌いだよねえ。鹿児島に旅行した時、記録的な豪雨で洪水に流されたもんねえ。覚えてるでしょ？ ロープで助けてもらったの。奇跡だったねえ。奇跡だったねえ。私たちは今、奇跡のおかげで生きているんだねえ。

お母さん、着いたよ。ほら、お父さんのお墓だよ？ 分かるでしょ？ お父さん。お母さんが好きだった人だよ？ お母さんが唯一オナラを聞かせた男の人だ



母は心底わたしを愛してくれていました。
わたしも母に限りない信頼を寄せ、
なにもかも相談していました。

ドン・ボスコの言葉 ～ドン・ボスコ自叙伝 P.35～

ゾエ征爾

サレジオ学院中学校・高等学校卒業。脚本家、演出家、俳優。大学在学中より劇団「はえぎわ」を主宰。2012年『〇〇トアル風景』で岸田國士戯曲賞受賞。舞台、映画、テレビ、ラジオ等で活躍中。www.haegiwa.net

おむらまりこ

目黒星美学園小学校 図工科教諭。武蔵野美術大学 大学院修了。絵本に『はいいろのこひつじ』『たいせつなおくりもの』『ヨハネ・ボスコのたいせつなゆめ』。イラストに『森本千絵うた作品集』。

よ？ お母さん、まだお墓に入らないよねえ？ まだ入らないよねえ？ お母さん、ほら、お父さんに手を合わせよう。お父さんとお母さんが出会ったことに感謝しよう。またいつか天国で会えることをお祈りしよう。お母さん、お母さん……。雨が激しくなってきたねえ、帰ろうねえ。お家帰ろうねえ。私とお母さんのお家に帰ろうねえ。お母さん、お母さっ……」

娘は泣いた。

そして、某月某日。

娘が母のオムツを取り替える。

娘「さ、オムツを取り替えましようねえ。はーい、座れますかあ？ はーい、大丈夫ですからねえ」

すると、母が口を開いた。
母「どこのどなたか存じませんが、いつもいつもすいませんねえ」

娘「いえいえ、いいんですよ」

母「あなたのような娘がいたら、どんなに幸せだろうねえ。どうもありがとうねえ。」

娘「……」

娘は、泣いて、笑って、また泣いた。母は歌を口ずさみ、娘は母のオムツを取り替える。幼い頃、母が自分にしてくれたように、優しく取り替える。今年のセミが鳴きはじめた。



応援も全力で。体育祭の一コマ。



朝、登校する生徒たちをハイタッチで迎える鳥越校長。



授業での一コマ。仲間の研究発表に注目！



長崎修学旅行でのミサ。



東北の被災地ボランティアには多くの生徒が参加。



体育祭で棒倒し。チームワーク、そして情熱？



梅村司教と記念撮影。



Ciao!
チヤオ!

サレジオ家族探訪

Salesian Family Visit

ドン・ボスコの精神を受け継いで、日本各地で活動するサレジオ家族の修道院・学校・教会・施設などを探訪。各地の「ドン・ボスコらしい、サレジオ家族らしい風景」をお届けします。

神奈川県横浜市

サレジオ学院中学校・高等学校

サレジオンスピリットを 持つ男になれ！

ドン・ボスコは、社会の中で苦しんでいる若者に自らの手を差し伸べたと同時に、彼らの志を継ぐ若者を育てていきました。「若者こそが社会を変えていく」というドン・ボスコの精神を、サレジオ学院は現代の日本社会の中で実現しているといっています。

教職員の明るくアットホームな雰囲気は大切に受け継がれています。

夢の実現「25歳の男づくり」

サレジオ学院の目指すもの、それは「25歳の男づくり」です。中高時代は一人の男子の人生の方向性を決める貴重な6年間ですが、それだけで完結するものではありません。卒業後、それからが人生本番です。私たちはそこに向けてのお手伝いをしている、大学合格だけが彼らの人生の目標ではない、ということを通して日々生徒たちと関わっています。25歳になったときの彼らの夢、自分像の実現のために、私たちは日々の教育活動を行っています。ドン・ボスコ伝を読んだ中学1年生の感想文を紹介します。

「どんな夢でも、辛いことを乗り越えなければかなえられません。ドン・ボスコは頑張って夢をかなえました。僕もかな

ランティアに参加した生徒の感想文です。

「自分は桂島で2日間作業をさせてもらいました。一つの家屋の屋根に、黒いペンキで『サヨナラ我が家』と書かれていました。とても悲しくなって涙が出そうでした。自分には帰る家があつて何の不自由もない生活を送ってられる。でもこの家の住人にはもう帰る家がない。自分たちの微力さを実感しました。でも同時に人と人は協力すれば何かできる。微力は無力でない、ということも感じました。」

私たちは、子どもたち、彼らの保護者と共に、彼らの将来を見据え、伸び代を信じ、彼らと共に歩んでいきます。それがドン・ボスコの学校で伝統的に大切にされてきた精神「アシステンツァ」（共にいること）です。

文・写真／サレジオ学院中学校・高等学校提供



サレジオ学院中学校・高等学校

神奈川県横浜市都筑区南山田 3-43-1

www.salesio-gakuin.ed.jp



イエスのカリタス修道女会

創立75周年

Suore della Carità di Gesù



2012年8月15日、イエスのカリタス修道女会は創立75周年を迎えます。
日本で誕生し、とくに貧しく小さい人びとのために働くカリタス会は、
言語や文化の違いを乗り越え、今日も世界15か国で、イエスのみ心の愛を伝えていきます。

会の誕生物語

私たちの修道会は、今から75年前、1937年8月15日に宮崎の地で誕生しました。とはいっても、その8年前に活動は始まっていた。イタリアから派遣された9人のサレジオ会宣教師たちが40日間の船旅をしてたどり着いた日本は、まさに貧しさそのものでした。チマッティ神父を団長とする彼らの導きのもと、教会の若い女性たちは貧しい人や身寄りのないお年寄りたちを訪問し始め、1932年にはまだ宮崎に国の福祉事業がなかった当時、彼らにもっと人間らしい生活をさせたいと、今でいう総合福祉施設「救護院」を建てました。ところが収容人数が増える一方、外国人が施設を運営する難しさが

増し、この事業を継続させていく必要性のもと、修道会が創立されたわけです。

会の歩み

修道生活を志した女性たちは非常に貧しい生活に甘んじ、育ち盛りの赤ちゃんや子どもたちを養育し、身寄りのない病人やお年寄りの世話をするため、日夜労働に明けくれないながらも、キリストにすべてを奉獻する生活に喜び



カリタス会の前身の愛子会員たち
前列中央が後の初代総長、長船タキ

を感じていました。「これらの最も貧しい人の一人にしたことは、私にしたのである」とのキリストの言葉が、無償の愛の奉仕を支えていました。彼女たちの命をかけた証が実を結び、多くの召命に恵まれ、カリタス会は少しずつ発展していきました。

世界へ羽ばたくカリタス会

私たちの会の特徴として、宣教女の海外派遣を積極的に行ってきたということがあります。創立者カヴォリ神父は、1956年、まだ若いカリタス会の母体から修道女を韓国に派遣することを決め、その後も南米に派遣を続けます。特に創立当初から幾人も韓国人が入会するなど、韓国との関わりの歴史は長く深いもの

です。そのため韓国でのカリタス会の広がりは目覚ましく、会員の約半数は韓国人です。言語や文化の違いを少しずつ乗り越えながら続けてきたお互いの交流が、豊かな実を結んでいます。

1986年にサレジオンファミリーに加盟し、1998年にはローマ教皇庁直轄の修道会として認可され、2008年に総本部はローマに移転しました。そして、2009年、宮崎カリタス修道女会という名は、私たちの会の精神をより反映する「イエスのカリタス修道女会」と改名されました。

現在15の国で約1000人のカリタス会員が、保育園・乳児院・養護施設・高齢者施設・病院などで社会福祉活動を、幼稚園・学校などで教育活動を、そして

われます。

「75年の愛の証」を明日につなぐ

最後に創立75周年にあたり、サレジオ家族の皆様宛てた、イエスのカリタス修道女会総長シスター志村百合子の感謝のメッセージをお伝えいたします。

「創立75周年は、小さな私たちを通して行われた神様の偉大なみ業をたたえ、私たちの歩みを支え励ましてくださった方々への感謝を新たにしながら、100周年へと向かう再出発の時です。今、私たちは、創立者や初期会員そして彼らの後に続いた姉妹たちの『75年の愛の証』をサレジオ家族の交わりの中で、若者たちと共に明日につなげていく決意を新たにしています。サレジオ家族の皆様どうぞ、これからもよろしく願いたします。」★

文／イエスのカリタス修道女会

イエスのカリタス修道女会 Suore della Carità di Gesù (SCG)

- 1937年創立
- 会の目的

すべての人、特に貧しい人、苦しんでいる人に対するイエスの憐れみ深い愛を証しする使命を、教会活動、社会福祉活動、教育活動、広報活動などを通して遂行する。

● 会員数

世界の会員数：1,000人
日本の会員数：450人（47支部）

● 活動地域（15か国）

日本、韓国、ボリビア、ブラジル、イタリア、ペルー、ドイツ、フィリピン、パプアニューギニア、オーストラリア、アメリカ合衆国、中国、アルゼンチン、ヴェトナム、南スーダン

● 活動内容

幼稚園・保育園、乳児院・児童養護施設、小学校・中学校・高等学校、職業訓練校・日本語学校、子供支援センター、障害者デイケアセンター、高齢者施設、診療所・病院、移住労働者の家、無料食堂、総合社会福祉館、聖書教室、聖体奉仕、典礼奉仕、家庭訪問、病院訪問、教会学校、広報活動、出版使徒職、信徒の黙想会、召命司牧活動など

● お問い合わせ

イエスのカリタス修道女会
日本管区本部
〒167-0021
東京都杉並区井草 4-20-5
Tel: 03-3396-2171
<http://www.m-caritas.jp>

スモールクワイア 新作CD「祝福の歌」 8月15日リリース！

5年ぶりに4枚目のCDを制作中です。創立記念日の8月15日にリリース！どうぞご期待ください。お求めの方はホームページ「スモールクワイア」のコーナーをご覧ください。
<http://www.m-caritas.jp/>



世界中で活躍するシスターたち



創立75周年の祝い



懐かしい以前の制服



創立75周年の祝いを前にみんなでパチリ！

教会活動・出版活動・社会活動などを通して、イエスのみ心の愛を伝える使命をさまざまな形で遂行しています。

喜びの輪を広げて

今年2012年8月15日に創立75周年を迎えるにあたり、準備のための祈り、全会員の感謝と喜びを織り込んだ記念文集の作成、有志による作曲の募集、会の歴史の研究や学びなど、会として1年間さまざまな準備を行っています。毎日一つ割り当てられた支部の会員たちのために全会員が心に向けて祈る「祈りのリレー」は、世界に広がる全会員の心を一つに結び、喜びの輪を広げました。6月10日には発祥の地である宮崎に、管区を越えて世界から250人の会員が集まって祝いました。8月15日には管区ごとに記念の行事が行





ありがとう！タシナリ神父 日本を愛した宣教師

今年 2012 年 1 月 27 日、宣教師クロドヴェオ・タシナリ神父が静かに私たちのもとを去った。出会った人々の心に温かな思い出と豊かな実りを残して。100 歳の誕生日を目前にして天に召されたのは、奇しくも日本の地を初めて踏んだ同じ 1 月 27 日だった。



●宣教師になって日本に行く決心

タシナリ神父は、1912年3月9日、イタリアのモデナで生まれた。深い信仰を母から学んだクロドヴェオ少年は、12歳でサレジオ会の中学校に入学、13歳の時に来校したチャッティ神父と決定的な出会いをする。チャッティ神父が生徒たちに語った日本での宣教の話に彼は強い関心を抱き、司祭への道を志すきっかけともなった。中学を終え転入したキエリの神学校の聖堂には日本26聖人殉教者の壁画があり、それを見つめながら宣教師となって日本へ行くことを心に決めていたという。

チャッティ神父に率いられた宣教師と共に、タシナリ神学生は故郷に別れを告げ、1930年1月27日、日本に上陸。以来、日本が大きく変貌する時代を、チャッティ神父の姿にならない、ドン・ボスコのように生き抜いた。

●愛する人柄になったら何でもできる

戦争末期、外国人が当局の監視下にある中、宣教師や神学生たちは長野県の野尻湖に疎開していたが、神学院長だったタシナリ神父は東京と行き来する際、戦禍を逃れて上野駅周辺に集まる悲惨な境遇の子どもたちを目にした。終戦の年、チャッティ管区長はタシナリ神父の訴えを受け、この子どもたちの救済事業を始めることにした。こうして東京サレジオ学園が創立。「若きタシナリ神父が、上野駅あたりにいた行き場のない少年を、自分の自転車の後ろに乗せて、練馬の畑の中を子どもと話しながら自転車を走らせている」。溝部脩司教はタシナリ神父の忘れられない姿をこのように述懐している。

若くして宮崎の小神学校校長、修練院・神学院院長、東京サレジオ学園園長、管区長を務め、その後も日向学院校長、育英高専校長として、数多くの会員と生徒を育てた。タシナリ神父に育てられた会員は、貧しく厳しい生活の中で「父」に愛された家庭の楽しい思い出、「当意即妙、おおらかな精神性と信念」（金子賢之介

神父）を忘れない。

キリシタン研究や、戦争に散った日本人サレジオ会員の伝記執筆にも表れるタシナリ神父の日本への愛、自分の功績にこだわらない姿は、福音を伝えるため「愛する人柄になったら何でもできる」（溝部司教）ことを私たちに教えてくれる。

●価値あるもの、それは永遠のものだけ

葬儀ミサの直前、師の机の中から「望み」と題された1994年10月2日付の手紙が見つかった。この手紙は、彼を生かしていたすべてを物語っている。

「私は神のみ旨ならば、日本で生涯を終えたいと願っています。キリスト者として、サレジオ会員としての召命をください。また、チャッティ神父様の近くで過ごさせてくださった神に、私は言葉に尽くせない感謝でいっぱいです。たくさん頂いた恵みに十分に応えられなかったことを悔やみます。……聖マリア、今も臨終の時も、私たちのために祈りください。価値あるもの、それは永遠のものである。」

私たちは、この「もう一人のドン・ボスコ」を日本に与えてくださったことを、神に感謝してやまない。ドン・タシナリ、ありがとうございます！ あなたの涙と苦勞、あなたのユーモアと愛を、私たちは忘れません。私たちをどうぞ見守り、私たちのために祈ってください！

(文/サレジオ会)



クロドヴェオ・タシナリ

サレジオ会司祭。1912年イタリア・モデナ生まれ。1930年来日。1936年司祭叙階。サレジオ神学院院長、東京サレジオ学園園長（創立）、サレジオ会日本管区長、日向学院中学校・高等学校校長、育英高専校長、杵築教会主任司祭などを歴任。2012年1月別府にて99歳で帰天。

大船渡を訪問して 今、私たちにできること

私は2月25日・26日に、岩手県大船渡市にある大船渡北小学校と海の星幼稚園、カリタスジャパンベースキャンに元気を届けたくて、学校の聖歌隊の希望者として行ってきました。まだ道路や鉄道が寸断されたままでしたので、大船渡まで6時間以上かかりました。東京よりも寒く一面の雪でした。

大船渡北小学校では、全児童の皆さんと仮設住宅の皆さん、地域の方も見に来てくださいました。震災前は、小学校の校庭だった場所はすべて仮設住宅として使われていました。私たちは「いのち」や「幸せ運べるように」「学校へ行きたい」などの曲を歌わせていただきました。大船渡北小学校のお友

達は、みんな元気がよくて、元気を届けたかったのですが、笑顔がいっぱいで、とても前向きに頑張っていることを感じ、逆に勇気をいただきました。

2日目に行った海の星幼稚園では、教会関係の方や、幼稚園のお友達のお母様とお父様が見に来てくださいました。「マリア様の心」など聖歌を歌わせていただきました。後ろの席で涙しながら一緒に聖歌を歌ってくださいたり、うなずきながら聞いてくださったり、なかなか消えない悲しみもあることを知りました。そしてその方たちの気持ちに寄りそうことができたらと、心をこめて歌いました。

その後、バスから被災地を見学しま



大船渡北小学校で児童・地域の人々に歌を届ける。



大船渡の人々との交流会。



参加した聖歌隊の有志メンバー。



海に向かって手を合わせて祈る。

星美学園小学校（東京都北区）の聖歌隊メンバーとして、今年2月に被災地を訪問した斉藤みづきさん当時5年生の作文を紹介します。

文 ● 斉藤みづき 星美学園小学校 5年C組

した。建物はあっても、中は何もなかった。ビルや天井が崩れ落ちてしまい、中がコンクリートの山になっていたところなど、そこはもとと何が違ったのか、人の暮らしがあつたのかなどと想像もできない状態でした。私が見ている海の中にまだ何千人もの人が眠っていると思うとお祈りにいっそう心がこもりました。

そして、被災地から離れた日常生活で、私たち子どもにできることを考えました。それは、目の前にいる人を大切にすることだと思いました。家族でも友達でも、だれに対しても今日の前にいる人を大切にすること。なぜなら人はつながっていると感じたからです。被災地を訪れて、交流会で皆さんに

温かく迎えられる、私はそのことを強く感じました。優しさや温かさをいただきました。被災地ではなくても、今私たちは周りの人を大切にすることが出来ます。その思いが人から人へ伝わっていくくれたら、私たちの家族が、私たちの学校が、私たちの日本が、優しさや温かさで包まれ、みんなが被災地を応援することができると思いました。

そして、私たちはお祈りすることが出来ます。なぜ今回の震災が起きたのか、神様のまごころは分からないけれど、被災地で暮らす方のために、また私たちが小さなことでも心をこめてささげることができるようにお祈りしたいと思いました。

PRESENT

ドン・ボスコの風
読者プレゼント

応募方法:

お名前(フルネーム)・住所・年齢・ご職業とご希望のプレゼント(A・B・C) いずれか一つを明記し、本誌のご感想をお書き添えの上、Eメールまたはハガキで下記宛先までお送りください。

【Eメールの場合】

DB-no-kaze@donboscojp.org

【ハガキの場合】

〒160-0004

東京都新宿区四谷1-9-7 ドン・ボスコ社内

「ドン・ボスコの風」編集事務局

応募締切: 2012年9月31日消印有効

当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。
ご応募いただいたお客様の個人情報は賞品の発送のみに使用し、その他には一切使用致しません。

A マンマ・マルゲリタ ドン・ボスコの母



ドン・ボスコの母マルゲリタは、ヨハネ少年をゆるぎない信仰で導き、身寄りのない少年たち母となった。神の摂理にすべてを委ねた母の物語。

ピーター・ラッピン著 柳沼千賀子訳
四六判並製 288頁
ドン・ボスコ社

5名様

B 戦災孤児の60年 孤児院に育った 子供達の記録



本誌 p.11 「孤児園の子どもの父と母」の著者・中田鈴雄さんによる、ドン・ボスコ学園と戦後60年の日々を描いた作品。

桜田鈴雄著
四六判並製 225頁
新風舎刊

10名様

C ルルドの泉 卓上置物 組立キット



フランス・ルルドの泉のかわいい組立キット。ルルドの洞窟、大聖堂、聖母マリア、ベルナデッタ、羊たちをあなたの卓上に。

イタリア製 10×15cm

5名様

(A,C はドン・ボスコ社提供 www.donboscosha.com)

from the Editor 編集後記

サレジオ家族には現在29の公式グループがあり、40万人以上のメンバーが所属。その半数以上はドン・ボスコの学校等の卒業生です。今号の「ドン・ボスコの風」で紹介されているように、ドン・ボスコの学校で福音的な価値観を受けた卒業生たちが、それぞれの生活の場で「新しい天と新しい地」(黙示録21・1)の建設に貢献しています。本誌を通してこの運動が広がり、さらに多くの方々がドン・ボスコの精神に触れ、福音に基づいた社会を築く協力者になることを願っています。(M)

ドン・ボスコの風 No. 9

SALESIAN BULLETIN JAPAN July 2012
2012年7月20日発行(年2回発行)

編集人 山野内 倫昭
発行人 アルド・チブリアニ
発行所 カトリック・サレジオ修道会
「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0004
東京都新宿区四谷1-9-7
ドン・ボスコ社内
電話:03-3351-7041
Fax:03-3351-7042
Eメール:DB-no-kaze@donboscojp.org

編集・デザイン制作 ドン・ボスコ社
印刷所 日之出印刷株式会社

本誌掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。
© カトリック・サレジオ修道会 2012

次号No.10は2013年1月発行予定です。「ドン・ボスコの風」バックナンバーは、サレジオ会ホームページ <http://salesians.jp> でご覧いただけます。
トップページの「ライブラリー」→「ドン・ボスコの風」



ドン・ボスコの風

Facebook ページ開設!

Facebook ページ ドン・ボスコの風 で 検索
ドン・ボスコの仲間たちとつながろう! いいね! をクリック!

サレジオから若者のために。
オープンなコミュニケーションサイト。

ユースブック

語らう、ココロのはなし。

ユースブック 検索

<http://salesians.jp/youthbook/>



カトリック・サレジオ修道会 日本管区
©2010 Salesians of Don Bosco in Japan. All Rights Reserved.

Info

お知らせ

武井アントニオ新司祭が誕生

2012年3月10日、武井アントニオ(フイ・ズイ・トウイ)氏の司祭叙階式が岡田武夫大司教の司式により、碑文谷教会で行われた。彼の恩人である司祭たちもベトナムやオーストラリアから駆けつけ、ベトナムの聖歌隊のエキゾチックな雰囲気と、碑文谷教会のオーソドックスな聖歌が武井新司祭を祝福し、教会の大きな喜びを表していた。武井神父は叙階式の感謝の挨拶の中で、「もし私が日本に来ていなかったら、私はここに立っていないかっただと思います。私が自分の召命を確信なものにしたのは、この日本においてです」と話した。翌11日、調布教会において初ミサが執り行われ、東日本大震災からちょうど1年の悲しみの日に、武井新司祭は大きな希望をもたらした。武井神父は1978年ベトナムで生まれ、20歳の時来日。2003年サレジオ会員として初誓願、上智大学神学部と聖



岡田武夫大司教による
按手



武井アントニオ神父

アントニオ神学院で学び、オーストラリア留学を経て司祭叙階。武井神父の明るくほらかな人柄は、あらゆる世代の人々から親しまれている。*

2012年5月18・22日、サレジオ・シスターズのイヴォンヌ・ランゴア総長が来日。東日本大震災の被災地や日本管区の支部を訪問し、大分では大分聖ヨゼフ修道院と聖堂の落成式にも参加した。2008年に総長に就任以来、総長は日本訪問を心待ちにしていたが、昨年3月の東日本大震災によって苦しいうち



別府修学院で志願者たちと共に



大船渡の仮設住宅を訪問

にある日本の人々に寄り添い、連帯のメッセージを届けることを強く願っていた。日本の人々が非常に困難で悲惨な状況にありながらも、落ち着いて、強く連帯し助け合う姿に、世界中の姉妹たちも勇気づけられたと話した。

日本の若者には、次のようなメッセージを贈った。「心に大きな夢をもってください。小さなやさしい目標に満足しないで、自分自身を他人に与えて生きるにふさわしい者になってください。皆さんの希望がもっと大きくなれば、未来はもっと美しいものになるでしょう。その希望が主イエスであるなら、イエスは生涯を意味と喜びに満ちたものにし、ドン・ボスコが約束したとおり、今も後の世においても幸せなものにするでしょう。」

日本のサレジオ・シスターズ修道女に対しては、すべての時間と生活を教育の使命にささげ、それぞれの地域と対話しながら活発な社会事業に励んでおり、協働者とサレジオ家族、教会とさらに広い地平へと開かれていく希望を見いだしたと評価。また、新たな召命の不足、修道女の高齢化などの課題、現代社会における修道生活と教育使命への挑戦などの苦勞に立ち向かうよう励まし、「皆さんの召命を愛し、一人ひとりの生活がメッセージとなり、希望と喜びをもたらす者になってください」と呼びかけた。

教育について、若者のためだけでなく、若者と共に働きながら、若者を主役にする責任があることを強調。若者の人生や喜び、深い渇きに寄り添い、存在に意味と方向付けを与えるような希望を示し、若者自身の心にある靈性や価値を浮かび上がらせるよう助けようと語った。*

「カトリック生活」1000号が間近

今年の10月号で、ドン・ボスコ社発行の月刊誌「カトリック生活」が1000号を迎える。日本のカトリック雑誌としては番歴史があり、戦時中、紙不足などによる一時中断以外、84年間ほぼ途切れることなく発行し続けたことになる。

1928年(昭和3年)5月24日に「ドン・ボスコ」第1号発行。初期は、サレジオ会が担当していた宮崎県・大分県の教区報として、またはサレジオ会機関としての役割があったが、やがてサレジオ会の事業の東京移転などの発展に伴い、教区を越えた全国紙として成長していく。戦後、「からしだね」(201・272号)と改題したが、農業雑誌と間違われることもあり、1952年に故バルバロ神父が「カトリック生活」(273号)に、2回の名称変更を経ての通算1000号である。

来日2年後に発行を始めたチマッティ神父を初め初期の宣教師たちの熱意に圧倒される。またその後継続してきたサレジオ会員や信徒協働者の努力、そしてなによりも読者の方々の励ましにより達成できたことだと言えよう。*



『カトリック生活』に
改題した273号



創刊号の「ドン・ボスコ」
第1号

Message from Rector Major

サレジオ会総長メッセージ

神は 苦しみの時も、希望の時も、 共にいてくださる

今も苦しまれる被災地の方々と日本の皆様へ

私は一瞬のうちに多大な苦しみと破壊と死をもたらした津波の映像を前にして大変心を痛めていました。また同時に私はこの艱難を前にしての日本人の姿に大変感銘を受けました。その団結力、連帯感、他人への意識、決して落ち込むことなく新しい社会を築いていこうという姿勢。

このような苦難を前にして浮かび上がってくる疑問はいつも「なぜ？」ということです。「なぜこんなことが起こるのか？」

それに対しての明らかな答えは決して見つかるものではありません。

すると次に起こってくる疑問は「神はどこにいるのか？」ということです。

そのとき、私たちはイエスの十字架を黙想しながら、こう言わなくてはなりません。「神は共にそこにいます」と。神はこの不当な苦しみを共にしながらそこにいます。と同時に、神はその希望をも私たちと共にしてくださっています。その希望とは、最後に残るのは死ではなく、唯一死に打ち勝つことができる「愛」なのだ、ということなのです。



サレジオ会総長

パスクアル・チャーベス神父

2012年5月 ローマ本部でのインタビューより